

患者の皆様へ

2020年5月20日 婦人科

当院で診断、治療される患者さんの診療情報などを利用させていただきます。診療情報などがこの研究で何のために、どのように使われているのかについて詳しく知りたい方は、下記の窓口にご連絡ください。

1. 研究課題名 黄体ホルミンにより産生されるプロラクチンが子宮体癌妊孕性温存治療に及ぼす影響の検討

2. 研究の意義・目的

子宮体癌で子宮温存療法を希望されている場合には通常、黄体ホルモンであるメドロキシプロゲステロン（MPA）療法が行われています。奏功率は比較的高いことが知られますが、寛解した患者さんの40-50%が再発するといわれています。黄体ホルモン投与により乳汁分泌ホルモンであるプロラクチン（PRL）が増加することが知られています。PRLは、細胞の増殖にも影響するため、子宮体癌治療には不利な影響を及ぼす可能性があります。子宮温存療法中のPRLの影響はよく分かっていません。黄体ホルモン投与中PRLの変化と治療への影響を調べます。

3. 研究の方法

3-1 対象患者：2009年から2019年に千葉大で妊孕性温存療法をおこなった子宮内膜異型増殖症および子宮体癌患者

3-2 調査項目

- ・患者背景：病名（子宮体がん、子宮内膜異型増殖症）、登録時の年齢・身長・体重・BMI、
- ・MPA療法開始日、寛解の有無、寛解日、寛解までの期間、再発の有無、再発日、再発時の病理結果
- ・血清PRL値（治療前、治療開始後2-3か月後、治療開始後6-8か月後）

3-3 評価方法

- ・治療開始前、治療開始後早期、治療開始後6-8か月後のPRL値を比較。それぞれの平均値を比較する。
- ・治療前PRL値および、経過中のPRLの値で治療成績に影響があるかを高PRL血症の有無で比較。
- ・寛解の判定は病理学的に子宮体癌、子宮内膜異型増殖症の消失で確認する。高PRL血症の有無で治療成績比較する。

4. 個人情報の取り扱いについて

本研究で得られた個人情報は匿名化して解析し、外部に洩れることのないように厳重に管理します。研究成果の発表にあたっては、患者さんの氏名などは一切公表しません。データ等は、千葉大学大学院医学研究院生殖医学教室の鍵のかかる棚で保管します。

5. 研究に診療情報などを利用して欲しくない場合について

ご協力頂けない場合には、原則として結果の公開前であれば情報の削除などの対応をしますので、下記の窓口にご遠慮なくお申し出ください。

文部科学省、厚生労働省が定める「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」（平成26年12月22日）に基づいて掲示を行っています。

研究実施機関：千葉大学医学部附属病院婦人科
本件のお問合せ先：千葉大学医学部附属病院婦人科
医師 三橋 暁
043 (222) 7171 内線 6893（婦人科外来）